

# 泉鏡花「X蠅螂鯨鉄道」論

—— 鉄道の意味するもの ——

市川祥子

「X蠅螂鯨鉄道」は明治二十九年十二月、三十年一月、四月にわたって『江湖文学』に発表された。一章から三章、四章から六章、七章から九章に分けて掲載されている。題名の「X鉄道」は結末の場面で、主人公・品子が彼女のもとを訪れたかつての友人・須賀子を踏切番の内職がてら鉄道の停車場へ送って行った、そこでの顛末を指して付けられている。品子はその踏切で須賀子に貰われて行く幼い我が子が汽車に轢かれそうになるのを助けようともせず、また、夫が憲兵に見つかったと勘違いして投げ棄てていった鯨が汽車に轢かれているのを見つめるのである。作品のなかにその停車場の駅名は示されていないが、彼女の越した場所から考えてそれを特定することは可能である。作中では彼女は新井に越したとなっている。須賀子の弟・千代太郎が雑師ヶ谷から馬に乗って来ること、須賀子がここから鉄道で牛込見附まで帰ると言っていることからこの新井は現在中野区のそれと考えていいだろう。

それならばこの鉄道は甲武鉄道であり、当時その停車場は新宿駅を過ぎると大久保、中野、荻窪の順であったので、ここは新井の最寄りの停車場ということで中野駅であると考えられる。甲武鉄道は明治十二年四月に新宿・立川間が開通、同八月には八王子まで延長、ついだ二十七年十月に新宿・牛込間、二十八年四月に牛込・飯田町間が開通している。現在の中央線に当たり、新宿から大久保を過ぎるまで大きく左にカーブしている線路はそこから先、立川までほぼ一直線に伸

びている。当時の交通の主力は甲州街道、青梅街道であったが、鉄道の敷設は街道沿いの住民の反対に合い、それとは離れたところ、草の茂る広大な武蔵野の原野の真ん中に真っ直ぐに引かれた線路であった。作品の最後にある「十町一列に穂の揃へる薄の穂と相並びて、東西に走りて雲に入る、二筋長き線路」というのはこの光景を指しているといえる。線路がひたすら真っ直ぐに引かれたということはこの鉄道の特徴となっており、当時の読者にとっては「新井」「二筋長き線路」とあるだけで十分に中野駅を想定し、その光景を思い描くことは可能であったと考えられる。ここでは作者がことさらに駅名を匿名として扱ったとする必要はないだろう。それではこの鉄道が甲武鉄道であり、停車場が中野駅であることは作品にとつてどのような意味があるのだろうか。その意味を作品の中で考える前に、当時この鉄道がどのような意味を持っていたのかを確認したい。この鉄道が許可された背景には「殊に青山練兵場ヲ通過スルヲ以テ将来同所ニ軍用停車場ヲ設置スルトキハ運兵上の利便著大ナルモノトシ」という意図があつたわけだが、折からの日清戦争においてその意図を十分に発揮し、軍隊の派遣、後には凱旋軍隊の帰還に大いに用いられた。軍隊の輸送がほぼ完了した後、二十七年十月に新宿・牛込間の営業運転を開始している。この鉄道が当時注目を集め関心を引いていたものであつたことがわかる。

新保邦寛「車窓の風景・△眼」の解放——明治三十年代の文学を考える  
(3)「」には「おそらく、明治中期の小説にとつて、鉄道を取り入

れることが最新のモードであった」という指摘がある。注目された鉄道の開通であつただけに、それを小説に取り入れることは「最新のモード」としての狙いもあつたと考えられる。しかし作品との関係でそれ以上に重要だと考えられるのは、二十七、八年に新宿・飯田町間に敷かれた甲武鉄道が東京市中を走る〔本邦嚆矢ノ市街鉄道<sup>四</sup>〕であつたことである。新橋、上野、新宿といった東京の入口と地方とを結んでいた鉄道は、ここで初めて東京の内側へ入り込み、市街地と郊外、田舎とを直接結ぶものとなつたのである。作品の発表された時期から考えて、その変化が作品の世界に何らかの影響を与えていると考えることは妥当であろう。それならば「最新のモード」以上の意味がこの鉄道に認められるのではないか。この作品にこの鉄道が用いられているわけもそこにあると考えてみたい。

品子は新井に越してくる以前に、富坂上の古本屋で須賀子の書いた小説『X』を借りようとしていた時、千代太郎と出会っている。おそらくその富坂を含む地域が彼女のかつての生活の場所であつた。彼女は数日前にそこから新井に越してきた。新井での彼女の生活は「長屋も長屋、こんな辺鄙な処の、路地の奥」という場所で「火鉢一ツ無い」〔手桶も不自由〕というほどの落魄ぶりであつた。富坂界限の市街地から〔汽車を下りると、田圃道で〕というような新井への引越は、没落してしまつた彼女達一家のさらなる生活の困窮に迫られてのものであつたろうと考えられ、この移動は彼女の零落を象徴的に物語っているだろう。須賀子が甲武鉄道によって目指すのは〔牛込見附〕、駅名でいえば牛込であり、また当時鉄道の終点は飯田町である。かつての彼女たちの生活の場所、市街地という点では富坂界限と同じ地域に含まれるということができるだろう。それならば品子にとってこの鉄道は、彼女が須賀子と一緒だつた女学校時代を含む幸福な時間を過ごした市街地と、現在の惨めな暮らしを余儀なくされている辺鄙な田舎とを繋ぐ通路であつたということになる。しかし通路であつたといえ、現在の彼女にとってそれはその身の零落をまざまざと感じさせるもの

に他ならないはずだ。これに乗りさえすれば瞬く間にかつての幸福な場所に戻ることができる、その通路である鉄道は、今の境遇では到底そのかなわない品子にとっては、かえつて戻れないという現実を突きつけてくる残酷なものであつたに違いない。彼女が踏切番の内職をしていたというのも、この数日間その鉄道を眺め、華やかな街へ帰つてゆく人々を見送つていたことを考えれば、内職ということの持つ惨めさを味わう以上に彼女の精神に負担を与えることであつたろう。現在の惨めな境遇こそが、彼女の中に子供が死んでしまえばいいという残酷な願望を生み出していたとすれば、彼女が踏切番の内職で線路を見つめていたことはその願望をさらに募らせるものであつたと考えられる。甲武鉄道がこの作品に用いられ、新井がその舞台である意味の一端はここにある。新井が市街地と直接結ばれた場所であつたこと、鉄道の開通によって生み出された新井という土地のこの特色こそが、この物語を成り立たせていたともいえるのだ。

鏡花は「X蠟螂蝮鉄道」に少し遅れて発表された「なゝもと桜」<sup>五</sup>においても、同じく新井と富坂の近く伝通院を結ぶ人物を登場させている。〔豊多摩郡の新井〕から〔伝通院裏の私立学校〕まで教えに出掛ける資吉の通う道筋は、〔新井村から雑司ヶ谷、音羽を通つて、大塚から伝通院まで行く間〕とされている。富坂は伝通院の裏手ではないので大塚を通らず関口町、水道町を通るにしても、当時新井と富坂界限を結ぶのはこの道筋が一般的で最も自然に感じられるものであつたろう。品子達が新井へ落ちて来たのも、わずかな荷物を抱えてこの道筋を逆に辿つて来たものと想像できる。しかし甲武鉄道はそれとは異なる道筋で新井と富坂とを結んだものであつた。甲武鉄道の市街線はそれまでの雑司ヶ谷を通る道筋とは異なり、中野から新宿、新宿御料地の南、青山練兵場の北、鮫ヶ橋の南を通つて〔赤坂離宮ノ北隅ヨリ学習院ノ南隅ニ隣道ヲ穿チ<sup>六</sup>〕て四ッ谷に出、そこから外堀の内側を通つて市ヶ谷から旧三崎練兵場脇の飯田町の停車場に至るものである。以前そこには通路といえるものではなく、そのつながり方はそれまでに人



が徒歩や車で移動していたものとは別の流れであったといえる。新保氏の論でもしばしば引用されているW・シヴェルプシユ「鉄道旅行の歴史」では、馬車で行く街道とは別に新しく鉄道という交通機関が設けられたことに関して、「このように、切通し、鉄道堤、トンネル、高架橋方式で地形を裁断してゆく鉄道線路は、十九世紀中葉のヨーロッパの風景を変え、また同様に旅行者の知覚をも変えた」、〔風景の自然な起伏に身をすり寄せていた街道の、定規で引いたように風景を裁断してゆく線路による代替は、この風景の喪失として体験され、トンネルの中では特にはつきりそう思われた〕といったような変化が指摘されている。ここではヨーロッパでの変化、しかも飯田町と中野とを結ぶよりはかなり長い距離の移動が対象とされているので、この論をそのまま「X蠅螂鯁鉄道」に当てはめることはできない。それにしてもそれまでに道の無かったところに、堀を抜け、トンネルを穿ち、橋梁を架け、定規で引いたように線路を通していくといった事情は甲武鉄道においても変わりがない。ことに真つ直ぐであることは〔十町一列〕の〔二筋長き線路〕という部分で強調されているのだ。風景にとつて、また利用者にとつて、鉄道がそれまでとは異なる結びつきを作り出したという点では、ここでなされた指摘はこの作品の場合にも有効だろう。

その新たな通路である鉄道に関して、品子が鉄道に決して乗ることはなく見つめるだけであったのにひきかえ、須賀子は当然の事として甲武鉄道に乗って新井を訪れ、品子の子供を連れて鉄道によって帰って行くという対照を見せる。亀井秀雄「感性の変革」では、この作品を〔Bの系列〕（須賀子の成功、優しさ、千代太郎の聡明さ）が、〔Aの系列〕（品子の窮迫、残酷さ、亭主の卑屈さ）の〔誇りを傷つけずに、あるいはA系列の誇りを回復してやる形で、現在の境遇から救い出す物語〕の形であり、〔当然読者はA系列の救済という結末を予想するはず〕にもかかわらず、Aの系列の救済を果して解決を見せるものでも、救済を果たさずに〔常套的な解決にアンチ・テーゼを提出する意図〕

を示すものでもないとしていた。品子と須賀子とが対照的なペアとして造形されていること、その設定が物語の展開を規定し予想させることが指摘されている。品子の窮迫と須賀子の成功という対照の一部ではあるのだが、この場合鉄道を見送ることと利用することとの対照には特別な意味を見出せるのではないだろうか。それは、須賀子が読者の期待通りに品子達を救済しなかった理由にもかわるのだろう。

品子と須賀子との関係を考えたい。品子の現在の生活に突然介入してきた須賀子は彼女から言葉を引き出す。須賀子との会話のなかで品子はその思いを語ったわけだが、それは須賀子という聞き手が現れて初めて語られる質のものだった。それ以前には語ろうにも、没落してしまった彼女の周囲に彼女の言葉を受け止める者はなかった。愚鈍といえるほどに描かれている夫には心の内を語り理解されるという望みはありえない。須賀子という聞き手の登場によって、恐らくは言葉にならない混沌として心のなかに渦巻いていたものが、言葉によって形を与えられて出てきたのだと解釈することができる。脇明子「幻想の論理」では「化銀杏」を扱った論のなかで、お貞が芳之助を相手に語りだすことについて、「これらの考えは、彼女の心の中に漠然とあったものだが、言葉に出すことによって意識され、動かしがたいものとなる。それまでなんとなく耐えてきたことに、急にがまんがでなくなるとお貞のあり方を分析していた。それと同様のあり方を「X蠅螂鯁鉄道」に見いだすことができるかもしれない。ただ、ここで会話に現れたものは、混沌が言葉を得てありのままに溢れ出てきたというのではないようだ。品子が須賀子に向かって現在の心境を語った言葉には、語る様子の描写が必ず与えられていたことに注意したい。二章以降六章に至るまで品子の言葉には必ずその語る様子の描写が加えられている。『X』を〔空な家政学〕と退け学問よりも裁縫が出来た方がましと語り始める時の（「しかしお須賀さん」の言葉には〔此声力籠りたれば〕、学問について〔なまじつかの其が邪魔になつて〕には〔主婦は音の調の変れる〕、〔私や何だつて、つまらない、学校へなんぞ行つたんでせ

う。邪魔で、邪魔でしやうがありません」と学問への嫌悪を言い募る時には「あるじは顔の色かはりぬ。唇をはふるはせつ」と、さらに「其眉動いたり」とある。学問への嫌悪を語る際のこれらの様子は、この言葉の意味の読み取りに制約を与えるだろう。特に二章において彼女は自ら「時々は堪らなく、キ、キと胸へ何だか込上げるの」と言っている。精神の状態が彼女のからだに影響を与える事を予め告げているこの言葉は、語る様子の描写によって精神の状態を読み取るという読み方を支持するものだと見える。語る様子の描写はこれらの言葉を語ることに對して品子が何らかの強い動揺を感じていることを知らせるものである。自分自身に強く言い聞かせなければ発せられなかった言葉なのかもしれないし、納得して語っているはずの言葉を音調や表情が裏切っているのかもしれない。彼女は後に「もう一度、あなたと打毬がして遊びたいね」と語っている。この際の様子の描写は「はらくと落涙せり」となっており、その様子は彼女が抑圧から解放されていることを示しているのではないだろうか。楽しかった学生時代の思い出は捨てきれないものであるらしく、それが後に語られているところから、学問への嫌悪を語っていた言葉が何らかの抑圧を被っていたことが明らかになる。須賀子が品子の前に現れさえしなければ、現在の境遇を嫌悪し、恵まれて楽しかった過去を思慕するこの言葉は発せられなかったのである。須賀子は彼女が須賀子に對して、のみでなく恐らく自分に對しても包み隠そうとしていた心の内を露呈させてしまったことになるだろう。

さらに品子は学校へ行ったこと、書籍を読んだことが邪魔になることと引き較べて我が子が邪魔になることを語る。その際にも同様に語る様子の描写はなされている。学校に通ったこと以上に子供が邪魔になるとして「こんなに邪魔になるものはありません」とする言葉には「声をふるはして」、「養が不十分な故でせう、毎月些とづゝ小さくありません」には「といひかけて眼をしばたゝけり」、「新粉にしてしまえばいゝ。いづれ、両親の玩弄物になつて、後で日が経てば、干からび

て、うつちやられる位なもんです」には「凜として、声に力を籠めて」。語る様子を描写することによって、言葉通りの意味以上の何事かを伝えようとする書き方は学問に對する嫌悪を語る際と変わらない。その様子も声の調子の変化や眼の表情を用いた類似したものである。では子供が邪魔になるという言葉には学問に對して持っていたのと同様の心理を想定することができようか。例えば、やつれた無力な子どもは彼女の置かれた子供すらも満足に養えないような惨めな境遇を常に自覚させ続ける存在であり、子どもへの愛着が深ければ深いほどそれだけかえって惨めさは切実に突きつけられるのであり、彼女の子供への激しい嫌悪はそのかなえられない愛情の裏返し表現なのだ。そして捨てられない愛着は言葉を裏切つて溢れ出して音調や表情に現されており、学問に對しての場合のように抑圧さえ取り除かれれば愛着を素直に表現できるものなのだ。

しかし、子供に對しては事情が異なるようだ。須賀子が品子の心の中を言い当てた時書き方に変化が生じている。これまで見てきたように、それまで品子の言葉に關しては語る様子の描写によって言葉通りの意味以上の何事かを読み取らせていた。子供に對する嫌悪を語る際にもその書き方はなされてきた。にもかかわらず、須賀子が子供を引き取ることを申し入れた際には「渠は真とはせざりしなり」と品子の心中を解説している。こうした解説はこれ以前には見られなかったものである。須賀子が「しまひにや殺さずには置きますまい！」と言った時には「主婦は蒼くなりぬ」、そこへ夫が入ってきた時の反応には「眼の色はたゞならず」とこれまで通り品子の様子の描写がなされてそこから心の中を窺うという書き方になつてくるもの、それに続けて「いま女作家に看破されし胸の内」とあり、心中が看破されたと断定してしまつていたのである。この断定に従えば品子は子供を抹殺したいという願望を持つていたことになる。学問に對する嫌悪を語ることが、それへの愛着の裏返しにとどまつており、そのことが明らかにされてきたのとは異なり、子供に對する嫌悪を語ることは、それを抹殺した

いという願望を揺るぎないものとしてしまっていたことになるのだ。この作品には一章から「持主なりし人の名なるべし」(幾度か繰返して愛読せる其眼には触れたりけむ)という記述があり、二人の会話を横から見つめ、推測の形で『X』に付いての情報を伝えている語り手を想定することが出来る。ここまでの品子の語る様子の描写も、彼がそのまま二人の会話を見つめ続け、自らの解釈を差し挟まず伝えていたということになる。その彼がここに来てあり方を変えたわけだ。語り手にとってここでの品子の心中、つまり子供を抹殺したいという願望ははつきりと断定可能なものであり、それを作品に提出すべきものであった。これまで品子の様子から彼女の心中を読み取らせてきた、それに解答を与えていることにもなる。この逸脱は子供を抹殺したいという常識では想像させにくい願望を確実に伝えるためだということはある。しかしその際品子に則した納得できるような心理のドラマはなく、心理の過程は追われず、須賀子によって心中は明らかにされ語り手がそれが正しいことを断定してしまう。音調や表情の描写によって会話の言葉以上の何事かを伝えようとする場合、その解釈はある程度作者と読者の共通の常識の基盤の上でなされると考えなければならぬ。学問に対する嫌悪を語る時、子供に対する嫌悪を語る時、その語る様子は常識的に解釈すれば愛着の裏返し表現であり、彼女が本当の願望を抑圧していると読み取ることのできるものだった。しかしここで語り手は、「(看破されし胸の内)」とまるで品子の心中にかなえてやり隠していたはつきりとした願望があったかのように断言する。品子の言葉が何事かを抑圧して語られているだろうと予想しつつ読み進んできた者にとっては、余りに唐突に提出された願望である。そもそもあの品子の言葉を聞いただけでなぜ須賀子が「(しまいにや殺さずには置きますまい)」と的確に彼女の心中を「(看破)」できるのか、常識的には納得しづらい。そこに合理的な脈絡を付けて解釈するためには説明が不足している。ここでの須賀子は登場人物としてのリアリティーを求められるよりは、その願望を提出するという役割が優先されている

といえるだろう。そしてそれは、願望の存在を断定しようとする語り手の志向に沿ったものであった。語り手はなぜそれまでのあり方を逸脱してまでこの感情を断定しなければならなかったのか。

これは品子にとっては隠していた心中を言い当てられるということである。心中を言い当てられることというモチーフは、親類によって定められた結婚、その結婚生活での女性の「不幸」を描くという点で、設定上「X蠅螂蝮鉄道」と共通点を持つ「化銀杏」においても、夫への殺意が夫自身によって言い当てられお貞が狂わんばかりに驚いたという部分に見られる。また、「一之巻」でも好意を持っている秀に将棋でわざと負けてやっている新次の心中が、富の市によって「(君はへつらふね)」と言い当てられた際に、「(全身の血は頭にのぼりて、耳ぐわつと鳴るとぞ覚えし)」となる場面にも現れている。特に「一之巻」に現れていることから鏡花の実体験のなかにそのモチーフの原型となつたものがあると推測することはできる。しかしここではそのモチーフがいかに作品のなかで機能しているかが問われなければならないだろう。先に挙げた「化銀杏」においては死を覚悟した夫・時彦の病床に付き添うお貞は、「(死んでくれりやい)」と思っていた心中を言い当てられてしまう。その時のお貞の様子は「(殆ど狂せむとせり)」とされている。しかしその後彼女の態度は一転して毅然としたものとなることに注意したい。冒頭とこの時のお貞の様子の描写が呼応していることから考えて、そこにはこれまで苦しめられていたものから解放された状態を読み取ることができるだろう。冒頭でおそらく夫への抑えきれない呪詛に悩んでいるであろうお貞の様子は「(誓へば炬燵に居眠りたるが、うつとりと覚めしもの如く、涼しき眼の中曇を帯びて、見るに俳晴やかならず、暗雲一帯眉宇をかすめて、渠は何をか物思へる)」とされていた。そして夫に心中の秘密を言い当てられた直後には「(はい、決して申訳はいたしません。)/」といと潔よく言放てる、両の瞳の曇は晴れつ。旭光一射霜を払ひて、水仙忽ち凜とせり」とある。ここでは彼女の眼の曇りによってその精神の状態が象徴的に表現され

ているといえるだろう。眼の曇りは晴れたのである。お貞は芳之助に「人の妻の身で、何たる恐しい了簡だらうと、心の鬼に責められちゃあ、片時も気がやすまらないで、始終胸がどき／＼する」と語り倫理に責められていることを告白はするものの、それに続いて「私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、左様思ふから恐怖んだよ」と訴えてもいるのだ。彼女を苦しめていたものは夫を抹殺したいという思いが消えないことへの罪悪感であったよりは、むしろその思いが夫に見つかつたらどうしようという恐れであったことを示している。

だからこそ心中を言い当てられることで彼女の悩みは一旦は解消され、彼女はある意味では解放されたといえるのである。しかし、その解放は一方でそれまでの生活を続けていくことを不可能にすることを意味するものでもあった。脇氏の言うように語ることによつて生み出された「死んでくれりやいゝ」という呪詛は一人歩きをし、その後実行され、彼女は精神を破綻させる。後日譚の部分で「化銀杏」と呼ばれる狂者となつてしまったことが示される彼女は、「西村の奥様は感心だ。……まるで嫁にきたてのやうに、旦那様を大事にする。……貞女の鑑だ」という評判の立つほどの生活を失つたのだ。心中を言い当てられることはお貞の言うところの「世間」で生活することを不可能にしたことになる。これと同様のあり方を、隠していた心中を言い当てられること、常識的には愛すべき立場の人間を抹殺したいと願っていることという共通点を持つ、「X蠟螂鯨鉄道」にも読み取れることは出来ないだろうか。

「化銀杏」の場合を援用しつつ、語り手の「看破されし胸の内」という言葉に従つて解釈すれば、次のような品子の心理が読み取れるだろう。子供を抹殺したいという願望は品子の心の中に漠然とした形で渦巻いており、彼女はそれを抑圧し直視しないで暮らしてきた。そうすることで彼女の心の中の安定は保たれ、生活は維持されていたのだ。須賀子さえ出現しなければ、子供は自然に衰えて行き、貧困のための「止むを得ない」死を迎えたのであろうし、「辺鄙な処」で「長屋なみ

のおかみさんづきあひ」のできる「鈍なもの」に成り果ててしまつても、それで何事もなく過ぎていつたはずだ。しかし須賀子の出現によつて品子の平衡にゆれが生じる。須賀子は彼女に言葉を語らせ、思いは形を得て少しづつ溢れ始める。ただ、まだ抑圧しているものがあらわになつたわけではない。抑圧しているものは巧妙に隠蔽されたままだった。須賀子との会話のなかで、品子は露骨に子供を殺してしまいたいと訴えているわけではない。彼女は我が子が衰えていくのを、干からびてやがては棄てられる新粉細工になぞらえて、婉曲に願望を表現しているのだ。新粉細工の人形が干からびてゆく様子は子殺しの生々しさを緩和している。しかし須賀子が「しまひや殺さずには置きますまい」と願望を言い放つことでそれは許されなくなる。その時彼女の抑圧は解かれ、学問に対しては楽しかった学生時代に戻りたいと口に出せるほどである。一方その解放は彼女に子供を抹殺したいという願望を確固としたものにしてしまった。須賀子によつて子供が連れ去られる場面、彼女は別れてしまふ子供との名残を惜しもうともしない。汽車の音に驚いた子供が自分のところに駆け寄つたために汽車に轢かれそうになつても、助けるどころか彼方を眺めたままである。この時彼女の願望は実行されようとしていたのだ。目の前に死んでしまえばいいと思う子供がいるよりは、須賀子が引き取ることで消えてしまったほうがよく、鉄道に轢かれて死んでしまえば願望がかなうのである。須賀子から子供を引き取る提案のあつた時、品子は「其は私一人の児ぢやありませんもの」(学校の気でいらつしやる)と言う。これとて子供をどうしても失いたくないという思いは窺えないものの、ともあれ一旦は拒絶する。常識的に予想しやすい対応である。しかし須賀子の「しまひにや殺さずには置きますまい」という言葉の後、子供が引き取られることに同意し手放してしまうまでの経緯は全く書かれていない。品子は煩悶も躊躇もしなかつたのだろうか。手放すにしても、貧乏な暮らしの中でろくに食べ物も与えられずもしかすればこのまま死んでしまうよりは裕福な家庭で育てられたほうが子供に

とって幸せであると考えたため、といったような想像しやすい解釈をその間の品子の心情に当てはめてよいものだろうか。

品子が子供を手放すことに同意することの代わりに書かれているのは、鯁と共に食べることを要求する夫への嫌悪と、「もう一度、あなたと打毬フリケットがして遊びたいね」という楽しかった学生時代への思慕であり、次の場面では子供は須賀子が連れ帰ることになってしまっている。この二つの会話から子供を手放すことは了解が可能であるかのような書き方であり、現在の惨めな境遇への嫌悪を語る彼女は、この境遇にあればそうした願望を抱くのは仕方のないこととも言いただけである。心中が言い当てられた際の彼女の様子は（主婦は蒼くなりぬ）とされる。常識的に考えれば子供を抹殺したいという願望は、彼女に対して倫理的に責めるものではあつたはずだ。しかし彼女はその願望が倫理にもとつていことに苦しんではいない。彼女を青ざめさせたものの、彼女の恐れは自分が倫理に反する残酷な思いを抱いてしまったことにはなく、抑えていた心中が暴かれて明らかにされてしまうことに、倫理の入り込む余地はない。なぜなら、彼女は倫理というようなものが成り立つ基盤を失ってしまったのだ。心中を言い当てられることは、自分の心に折り合いを付けて守っていたものを失うことである。彼女の心が維持してきた秩序が崩れてしまうこと。むしろそのことの方が彼女にとっては重大な位置を占めているように考えられる。失ったものは倫理的な自分という安心できる場所であり、彼女が須賀子との会話のなかでそうあろうと望んでいた（語る様子の描写はそれが何らかの抑圧を被っているものだとすることを明かしてしまっていたけれども）良き妻、良き母という自分の像である。この願望の露見は常識といわれるものの範囲内で生活することを不可能にする。心中をあらわにすることは日常の生活という点に関しては破綻を招くものであったのだ。

「化銀杏」では、夫を抹殺したいという願望を実行したお貞は「化銀

杏」と呼ばれる狂人になってしまうが、「X蠅螂鯁鉄道」においても品子が日常の生活を失う徴候は見えている。子供を引き取ってゆく須賀子を見送って停車場まで行く品子の姿を考えたい。品子の全身の姿はこの時に初めて描写される。それまでも桶もない、土瓶も欠けたという貧困ぶりは語られていたが、ここで示される（縞柄も分らぬまで着古したる素裕の裾は切れて、海松の如く、もつれて、垂れて）、（履き切らしたる冷飯草履に、身をまかし棄ててぞ歩し来る）という姿は、須賀子との会話の際の毅然とした話ぶりからは予想しづらいほどの極端な落ちぶれ方であった。貧困のためのみすばらしさばかりでなく、すでに全てを投げ捨ててしまったかのような様子である。とくにその服装の荒れ方の甚だしきは彼女を現実離れた存在に感じさせはしないだろうか。続いてその様子は（あはれ、其まゝ野に臥しなば、小町の鬮カケとなんぬべく、目ざましきまでに衰えたり）と描写されている。小町の鬮とは謡曲「通小町」等に見られる小町の姿を指しているものであり、何系統かの小町伝説のなかで「通小町」に用いられているのは深草の少将との愛憎の伝説である。小町は百夜通いをする少将を冷遇し続け、少将は九十九夜目に死んでしまう。小町は少将の霊に祟られて未だに成仏できず、その鬮は薄の原で風雨にさらされ、目からは薄が生えており、「秋風の吹くにつけてもあなめゝゝ」（ああ目がいたい）と詠ずる。品子の姿の描写の近くには（一叢薄の薄き雲、白き穂の茂れるなかに）（十町一列に穂の揃へる薄の穂と相並びて）とあり、薄の原が周辺の光景として描かれている。ここで彼女の姿に小町の鬮が重ねられるのは、薄の原を歩む衰弱した美女という取り合わせが、その伝説を想起させるに十分なものだったからである。しかし関係はそれだけにとどまらない。「通小町」は誠実に小町の元へ通う少将とそれには応えない小町という百夜通いの話と、薄の原の鬮である小町の霊が僧に戒を受けて成仏しようとするところへ少将の霊が現れて小町を引きとどめ、共に地獄に留まることを求めて引き戻そうとする話とに分けることができるが、特に小町の成仏を妨げる少将の言動は、

この作品と「化銀杏」とのもう一つの共通点である、共に死ぬ覚悟のなかに夫婦の愛情の証を求める夫の要求というモチーフと重なりはしないだろうか。「化銀杏」で胃病を患う時彦は「何故一所に死ぬとは言つてくれない。愛情といふものは、そんな淡々しいものではない」と言い、夫婦間の愛情を一所に死ぬ覚悟を示すというところに求めている。妻は到底その要求に応じられず、逆に「あゝ、執念深い人だ」と思つて重荷に感じてしまう。「X蠅螂蝮鉄道」でも品子の夫は自分の好物である鰻を共に食べることを要求し、「何うせ中毒つて死ぬものなら一所ぢやあないか。毒にあたる分には誰だつておなじことだのに、夫婦のなかで、一人が食べるものを、一人が食べないといふことはない」と言う。ここでも一所に死ぬことが求められているのだ。自分の愛情、夫婦という関係によつて妻たちの死をも要求し得ると信じる夫、それに違和感を覚える妻というモチーフが再び用いられている。これは深草の少将が自分の執着のために、小町が成仏しようとしているのを妨げると重なる行動ではなかったか。品子は狂人と呼ばれるお貞ほど明確に日常の生活を逸脱してはいない。しかし、伝説をはらんでいるという点では、品子も安定した日常の生活に在るとは言い難いのだ。そしてその伝説を彼女に重ねているのは先の語り手である。品子の心理が十分に書き込まれているわけでもなく、願望は須賀子によつて唐突に提出されていた。須賀子という役割の優先した人物を用い、それまでの傍観という制約を破つて心中を言い当てられること、それによつて日常の生活を失うことという「化銀杏」に見られたモチーフを繰り返した語り手の志向を指摘できるだろう。

品子が日常の生活を失うこと、このことは作品全体の根幹にかかわるはずだ。この作品がただ結婚制度のために抑圧された女性の不幸を訴える物語から一線を隔たっているのはこの点であり、亀井氏の言う「(Bの系列)」の救済が不徹底なもののためであろう。語り手の向こうにはほの見える作家の関心はむしろ、日常の生活の基盤を失った彼女の生きる空間を作り上げることにあつたはずだと思われるからであ

る。「一叢薄の薄き雲、白き穂の茂れるなかに」「十町一列に穂の揃へる薄の穂と相並びて」と描かれる薄の原は、鉄道が原野の真ん中を走らざるを得なかつたという事情を考えれば、当時新井・中野周辺の光景として十分見られたはずのものだ。その実際の光景を基にしつつも、「秋の日はやゝうすづきて、遠近の森は暗うなりぬ」という薄暮の中「十町一列に穂の揃へる薄の穂と相並びて、東西に走りて雲に入る、二筋長き線路」という秩序正しく並ぶ薄、雲に続く線路といった書きぶりには、現実味を離れた、いわば幻想的な色彩が込められているだろう。ここでは新井・中野とはそのような土地として描かれているのだ。そこに、さらに現実味を失つた品子の姿が置かれている。

そして甲武鉄道は市街地とそのような土地とをそれまでのつながりとは異なる経路を通つて新しく結んだ通路であつた。鉄道というそれまでとは異なる通路で結ばれることによつて、この土地が幻想をはらむものとして新しく立ち現れてきたといえるのだろう。鉄道によつて結ばれた土地と土地は地続きには違いない。しかし、それらが旧来の街道を歩いて結ばれるのは違った意味合いを帯びてくるはずだ。それまでとは異なる経路を通つていとすればなおさらである。ここでもまた先に引用した『鉄道旅行の歴史』にある「一面では鉄道は、容易には手に入りにくかつた新しい空間をどしどし開発し、他面でその間の空間を抹殺しながら、そうしているということだ。この中間の空間または旅の空間、これは技術前の時代のゆつくりとした、しかも重労働の旅では、充分に堪能されたものであつたが、鉄道旅行ではこれが消えてしまう。鉄道の知つていいるのは、ただもう出発地と終着地のみである」という指摘が参考になるだろう。鉄道は隔たつた土地を直接繋ぐ通路でもあり、その反面、中間の空間を抹殺して土地と土地とのつながりを断絶するものでもある。甲武鉄道は市街地と中野とを結んだ。それは反面、その二つの土地を断絶することでもある。この作品において新井・中野は辺鄙な田舎であるという点で、品子の身の零落を象徴的に物語る土地であるとともに、市街地とは結ばれつつも断



絶した土地、須賀子という成功者の暮らす市街地を対岸にしつつ、甚だしく零落した品子を置き伝説をはらむ異質な空間として存在しているのだ。

ここに至って須賀子がこの鉄道に乗って来たことを意味付けることができる。須賀子の役割は品子の心中を暴くことであった。品子の保とうとしていた秩序を崩壊させて去ってゆく。彼女は品子の境遇を聞き、同情して涙は流すものの、彼女の救済は意図せず、しかも自分自身はこの訪問によって一向に影響を被らない。日常の生活を破綻させるような圧倒的な変化を相手に与えながら自分は無傷で帰って行く。須賀子は品子と同じ位置に立つことはない。彼女は品子にとって鉄道に隔てられた異質な空間からやって来た異質な人物である。彼女が鉄道を利用することは彼女が品子とは異質な人物であることを明確に示すものであり、品子の暮らす土地が須賀子のそれとは異質であることを強調するものでもあった。

新井・中野という土地をそのような幻想をはらむ空間にし得たのは、そこに広がる薄の原である以前に、鉄道という交通機関で市街地と結ばれたことであった。当時新しく引かれた鉄道は、鏡花をしてそれまでの光景のなかに新たな空間を創造させたといえることができる。鉄道が登場人物を舞台である特別な空間に運んでゆくことは典型的には「高野聖」に見られるパターンである。それに先立つこの「X蠅螂鯁鉄道」では甲武鉄道がその役割を果たしていた。後に、お化けを「江戸の真中電車の鈴の聞える所へ出したいと思ふ」とまでいう鏡花である。お化け、言い換えれば日常の生活から隔たった空間が「深山幽谷の森厳なる風物の中」に繰り広げられることを望むのではない。日常の生活と地続きのところにそれは現れるのだ。そうした日常の空間を容れさせていく鏡花の作品の特質と、それに果たす鉄道の役割とを考える上で、「X蠅螂鯁鉄道」は示唆的な作品であるといえるだろう。

(一) 「むかしの杉並—古老座談会」(杉並区教育委員会・一九七〇年)には、街道沿いの住民が鉄道の敷設に反対した理由として、藁拭きの屋根に汽車の火の粉がかかることによる火災を嫌ったため、駅が出来ると甲州街道の旅人が宿泊しなくなると言う恐れのため、鉄道が通ると沿線の蚕が満足に繭を作らなくなると言われていたため等が挙げられている。

(二) 「甲武鉄道市街線紀要」(甲武鉄道株式会社・明治二十九年)。

(三) 「稿本近代文学」第十五集(一九九〇年一月)所収。

(四) 前掲「甲武鉄道市街線紀要」。

(五) 明治三〇年一月、「新著月刊」第九巻。

(六) 前掲「甲武鉄道市街線紀要」。

(七) ヴォルフガング・シベルプシュ『鉄道旅行の歴史—一九世紀における空間と時間の工業化—』(法政大学出版局・一九八二年)。

(八) さらに同書には「時間と空間の抹殺とは、それまで独裁的に力を振るってきた自然空間に鉄道が侵入するさまを表現する、十九世紀初期の共通表現である」とある。「全国汽車発着時刻及乗車賃金表」(官報第三千九百七十八号附録・明治二十九年九月三十日)によれば、飯田町と国分寺や八王子を結ぶ直通列車は上り下りとも一日に九本、飯田町・中野間の所要時間は概ね四十分から四十五分である。この場合は距離が比較的短いため、所要時間という点では「抹殺」というほどの変化は見られない。(資料は「懐しの時刻表」中央社による)。

(九) 亀井秀雄「感性の変革」(講談社・一九八三年)。

(十) 脇明子「幻想の論理」(講談社・一九七四年)。

(十一) 明治二十九年二月、「文芸倶楽部」第二巻第二編。

(十二) 明治二十九年五月、「文芸倶楽部」第二巻第六編。

(十三) この夫の好むという鯁は、おいしいことは知られていても猛毒のために敬遠されがちな魚である。明治以前は特に家計の継続を重んじる武家の間では、頓死の可能性のある鯁は避けられた。また、明治以降でもその毒が犯罪に使われるのを防ぐために無闇に取引することは憚られた。作品内で「御法度の」と言われ、それを抱えた夫が憲兵を恐れるのもそのためである。それだけでなく、この時代

鰻は貧民と呼ばれる人々とつながりの深い食べ物だった。『最暗黒の東京』（松原岩五郎、民友社・明治二六年、引用は岩波文庫より）に（しかして此処に彼らの境界においてすこぶる幸福なるは河豚の廉価なる事なり）（普通の人はその有毒なるを懼れて食するもの稀なるより自然と市場に放擲さる）とあるように、毒を恐れて余裕のある人々が食べないために、彼らに安く売り払われたのだ。最上層の人々のための飲食店はともかく、鰻を自分で調理して食べるということには、下層の、貧乏染みた、貪婪なといった意味を読み取ることができる。須賀子が（あがるんですか、あの、鰻というものを、え？）とひどく驚き、（鰻というもの）と全く縁遠いものとして扱うのは、ただ毒があるというためではなく、恵まれた境遇にいる須賀子にとっては、そのようなものと考えられているからである。（見ると、ハヤ蟲唾が走つてたまらんぢや）というほど好むという設定にしたことで、夫には（其時分は立派にお暮しなすつた方）が没落したとは思えないほどの愚鈍さが与えられている。同じ食べ物に関して、焼き芋を買ったことを恥じ入るような品子には耐えられないものであったということになろう。

（十四）（二五）「予の態度」（『新声』第一九卷一号・明治四一年七月）。

（一）内は特に注を付さない限り扱っている作品からの引用を示す。鏡花作品の本文の引用は岩波書店版『鏡花全集』により、旧字を新字に改め、総ルビをパラルビとした。）

（本稿は、一九九一年六月二九日、泉鏡花研究会第十五回例会における口頭発表に基づいたものである。）